
朝霧黙示録—HIGH SCHOOL OF THE DEAD in ASAGI—

猫剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝霧黙示録―HIGH SCHOOL OF THE DEAD
in ASAGI―

【Nコード】

N1903N

【作者名】

猫剣士

【あらすじ】

某通りすがりの仮面ライダーのように、自分の世界を^{ゲーム}探し始めた朝霧アサギ。そんな彼女が流れ着いた世界は、悪魔や天使がいるわけでもなく、魔法や剣が織りなすファンタジー世界でもない、ごく普通の世界だった。

あの日までは…

ブローグ | 新たな世界（前書き）

アニメ1話終盤の展開に心動かされて書き出してみました。
ああいった展開、超好物です。

ブログ―新たな世界

目を開けると、見知らぬ天井が見えた。
体を起こして辺りを見回すと、そこは普通の部屋だった。
そして自分が寝ていたのがベッドだと気付く。

…今回は変ね。

疑問を抱きながら、部屋を確認するように見回る。
どうやらここはマンションの一室で、家具一式が揃っている。
生活するのに不自由しないだろう。
特に変わった物は無く、強いて言うなら机の上にある学生証。
そして来月の日付に『入学式』と印が付いたカレンダー。

次にベランダに出て外を確認する。

住宅地が広がり、駅が近くにある。

人が道を歩き、雲が浮かぶ青空が頭上に広がる。

…もしかして、ここって地球？

更に疑問が増えたが、それは簡単に解決した。

空気中から魔力が殆ど感じられないのだ。

それにこの景色、確か小暮宗一郎とかいう警察官がいた世界と全く同じなのに気付いた。

…というか、私の世界とも似てるのよね。

田舎と都心の違いって位かしら？

山があり、のどかな田園風景が広がる自分の故郷を思い出す。

『携帯袋』が問題なく使える事に安堵し、愛銃を取り出す。

恐らく、否。

確実に使う事は無いだろうが、商売道具の手入れは基本中の基本だ。それに苦楽を共にし、死線をくぐり抜けてきた相棒とも言えるこの二丁拳銃を、ぞんざいに扱う事は出来なかった。

メンテナンスを終え、自分の名前が入った学生証を手についた。

私立藤見学園 一年生

朝霧アサギ

今までの殺伐としたファンタジー世界からおさらばし、平和な世界で学生生活を送る事に胸を膨らませ、彼女はこの世界の詳しい情報を手に入れるべく部屋を出た。

ブログ「新たな世界（後書き）」

どうでしょうか？

オリジナル主人公とかは他の作者様に任せました。

自分はあるてクロスオーバー女主人公でやってみる事にしました。

オリジナル男ヒロインを出す予定ですのでご期待下さい。

第1話「日常（前書き）」

どうも。

お待ちしてた方、お待たせしました。

いやゝ、原作に無い部分を書くのは不安とドキドキが入り混じった感覚で良いですね。

やっぱり良いね、執筆作業は。

誤字脱字、気になる所がありましたら遠慮なくどうぞ。
ではでは。

第1話「日常」

「でね？」

アサギさんにも買って貰いたいんですよ。

テンピースの最新刊」

「なんで？」

「帯に付いてる応募券、2枚一口で特製フィギアが貰えるんですよ」

私立藤美学園、弓道部弓道場に一組の男女がいた。

長い黒髪をポニーテールにした2年A組の弓塚優綺と、セミロングの黒髪に髪留めをしている2年A組の朝霧アサギ。

アサギは弓道部員ではないが、自主練習をしてる優綺と暇つぶしの雑談をしに来たのだ。

そして彼は今、的に向けて弓を引いている。

「アタシその漫画集めてないし」

「これを期に読んでみて下さいよ。」

面白いですから」

「何巻？」

「84巻」

優綺の放った矢が的の真ん中を捉える。

先に放っていた3本の矢は、その回りを囲むように刺さっていた。

「待て。」

アタシにそこまで買い揃えろと？」

「古本屋でなら安く揃いますよ？」

「買うの前提ですか。」

それで、アンタが欲しいフィギアって？」

「それは『剛体王・ゲソキング』です！」

弓で自分のカバンを指す。

それにはサングラスに赤マントを装備した、イカ頭のマッチョマンキーホルダーが付いていた。

「限定版の1/6サイズで、彼のフィギアはそれが初めてなんです」
「でしょうね。」

需要が無さそうだし」

「え〜？」

カッコイイじゃないですか」

4本の矢を撃ち終えたので、優綺は矢の刺さった的に向かう。

「いい趣味してる」

「でしょ？」

「嫌味で言っ たつもりなんだけど」

アサギの言葉に苦笑いしながら、的から矢を引き抜く。
すると壁を背に座ってたアサギが、スカートに付いた埃を落としたながら立ち上がる。

「それじゃあアタシは寮に戻るけど、まだやってくの？」

「そうですね。」

あとちょっとやってから帰ります」

「そう。」

じゃあ、また明日ね」

優綺に背を向け、ヒラヒラと手を振りながら帰ろうとした時、彼がアサギの名前を呼んだ。

「変な質問なんです、笑わないで聞いてくれますか？」
「内容によるわね」

ありがとうございます、と言う彼の背をアサギは見る。

「何か最近、空気というか世界の雰囲気がおかしい気がするんです。だからというわけじゃないんですが、もしもですよ？
世界が終わってしまうとしたら、誰と一緒にいたいんですか？」

振り向き不安な表情で問う優綺は、夕日に照らされてるせいがとても儚く、そのまま消えてしまいそうに見えた。

…ヤベエ。
今すぐにでも襲いかかりたい！

アサギは必死で自分の野性を理性で押さえ込んだ。
学園美少女ランキングに間違っただけランクインする様な外見をして
いる優綺は、男女双方から人気があった。

勉強も運動もでき、人柄も良ければ言う事がある筈がない。
そんな彼が、まるでギャルゲーのヒロイン並の振り向きをしたのだ。
その構図の破壊力は殺人兵器と言っても過言ではない。

だがアサギは冷静に、しかし本音も混ぜながら言葉を作る。

「思い付かないわね。」

まあ、アンタが寂しそうにしてたら一緒にいてあげてもいいわ」

「まるでヒーローみたいですね、アサギさん」

「冗談。」

そんな柄じゃないし、どうせならヒロインがいいわ」

「貴女らしい」

当然、と胸を張るアサギに優綺は微笑む。

そうしてる内に夕焼けはより濃くなり、すぐに日は完全に沈んでしまふ時間になっていた。

「変な話をしてすみませんね」

「別に気にしないでいいわ。」

それじゃあアタシ帰るけど、暇だったら小室君を元気づけてあげて例のアレで随分と傷心らしいから」

そしてアサギは弓道場を後にした。

■

「気にするな、って言ったけどね」

寮へ向かうアサギは、優綺の言葉が気掛かりで仕方なかった。と言うより、似たような考えをしていた。

この世界に来て藤美学園に入学し早1年、以前の生活とは真逆のゆつたりとした学生生活を送っていた。

時空を移動したりプリニーに転生したりしてたので、年齢があやふやになってしまい実は2回目の高校生だが意外と悪くはない。

普通に友人を作り、普通に授業を受け、普通に放課後ティータイムを楽しむ生活は、荒んだアサギの心を癒していた。

しかし最近、その愛すべき平穏な日常の随所に不穏な気配が漂っていたのだ。

「ニヤ」

寮棟の入口に一匹の黒猫がいた。

そう、この黒猫が警鐘を鳴らしに来たと言っても過言ではない。

3ヶ月前にこの猫が現れ始めた。

最初は、ベタな不幸の知らせの現場に出くわしたもののね、思ったが猫はその日を境に毎日姿を現した。

晴れの日だろうと雨の日だろうと、現れなかった日は一度もなく寮棟の入り口に座っていた。

あまりにも不気味なので追い払おうとしたが、猫の巧みな『甘え』に返り討ちされた。

「アンタが何を伝えたいのか分からないけど、備えとけて事？」

ひっくり返った黒猫のお腹を撫でながら問うアサギに、猫は満足気な表情を浮かべた。
気がする。

「あれ？」

朝霧さん？」

名前を呼ばれ振り向くと、そこに見知った人物がいた。

ロングの茶髪に触覚の様なアホ毛が2本と特徴的な髪型をした女生徒、2年A組の宮本麗。

クラスは違うが、アサギとは友人関係である。

「あら、宮本さん。

こんにちは」

「こんにちは。

あ、猫だ」

アサギと戯れてる黒猫を見つけ、麗もそれに加わる。

「ところで小室君を振ったって話、本当？」

猫を撫でてた麗の手が止まった。

「誰から聞いたの？」

「悪気は無かったんだけど、通りがかった時に聞こえちゃってね」
「そう」

解放された猫が、その場で毛繕いを始めるのを2人は見つめる。

「でも、完全に嫌いになったわけじゃないんでしょ？」

「っ！？」

「分かるわよ。」

「というかモロバレ。」

井豪君と2人である時に小室君見かけると、気まずそうにするじゃん。

一瞬だけど、気付くなつてというのが無理な注文。

でもまあ、「あの件」の小室君の対応は良くなかったわね」

「その話は止めて」

麗の顔が怒りの表情に変わる。

理由は知っているし、そうなっちゃったいきさつも察しがつく。
しかし、だからといって行動を起こす理由がアサギには無い。

元々この世界にとって余所者の彼女に、人の一生を左右しかねない出来事に介入するのは気が向かない。

そもそも介入しまくった結果、散々たる運命を辿ってきたのだ。
流石に懲りた。

「ごめんね、ちょっとでしゃばった。

でも私的な意見を言わせて貰えば、小室君とのコンビも良かったわ」
「どうも」

「お詫びと言っちゃあなんだけど、観たいって言うてた映画見る？
借りてるんだけど」

「飲み物とお菓子出してくれるなら」
「では出しましょう」

立ち上がった2人は互いに微笑みあった。

猫はいつの間にかいなくなっていた。

アサギの部屋は1階の寮棟入り口近くで、すぐに着いた。

忘れ物をした時は短時間で取りに来れるので、この位置はかなり便利で気に入っている。

「おじゃまします」

「どうぞ」

「うわ！

綺麗に片付いてる！？」

麗が部屋の中を見て感嘆の声をあげる。

世界を旅するアサギは一ヶ所に留まる事がほとんどなく、私物は少なめにと決めている。

それ故、部屋は生徒に貸し出される時と同じような状態に保たれてはいるが、生活感が無いわけではない。

それはアサギがこの世界を気に入っているからなのだが、麗は知る由もない。

「部屋移動する時、アサギさんに手伝ってもらおうかな」

ふと、麗が部屋の隅に1つかバンが置いてあるのに気付いた。

ボストンバック型のスクールバックで、膨らんでいる事から中に色々が入っているのが分かる。

「どうしたのこれ？」

修学旅行とか、まだだいたい先だったと思うんだけど？」

「前にテレビで防災特集やっててね。

何となく防災袋みたいな物を作ってみたの」

「へ」

とは言ったものの、実際は何となくではなく明確な危機感によって用意したのだ。

中身はテレビで紹介するような物でなく、アサギが長年に渡って積み重ねた経験によって選出された物が詰まっている。

無論、基本である携帯食料や飲料水も当然入っている。

「使う時が来ないのが一番良いんだけどね」

「でも備えあれば憂いなしって言うし、ちょっとは安心ね」

麗の言葉にアサギは頷いた。

万が一の事態が起きた場合、何も準備してないよりかは遥かにマシだ。

やるべき事はやったと自分に言い聞かせるが、不安を完全に消す事はできない。

「アタシも焼きが回ったかな？」

いや、まだそんな年じゃないか。

自身の弱気に苦笑し、菓子と飲み物を持って麗の待つ部屋へ行く。

「…そうよ。」

自分の事を『超抜無敵』とか言う死神や、自称宇宙最強の魔王。世界を救ったヒーローとも戦った私に、何とかできない事なんて無いわ。

後ろ向きは自分には似合わない、そう思い映画を楽しむ事を考える。

今までの経験で裏打ちされた自分の力を信じ、来るかもしれないXデーを切り抜ける。

アサギは心に誓い、DVDをセットする。

「では見ますか。」

『バイオハザード』を」

「え？」

「え？」

第1話「日常（後書き）」

アサギ

「何気ない日常、それは復活した『究極の闇をもたらす存在』によって終わりを告げた」

麗

「誰それ？」

アサギ

「グロンギ化する人々。

その時、古代の戦士が現代に蘇る！」

優綺

「ロマンですね」

アサギ

「次回『仮面ライダーアサギ』第3話！

『小室、超変身！！』

その瞳は何を見る？」

麗

「ちよつと孝」

孝

「知らねえよ！？」

第2話「最初の日常（前書き）」

暑中お見舞い申し上げます。

昨今、皆様如何お過ごしでしょうか？

お変わりはありませんでしょうか？

プリニーになってしまった私、朝霧アサギは無事に人間に戻り自分の世界を探す旅に出ました。

そしてたどり着い世界には、驚天動地の事態が待ち構えておりました。

このような展開、誰が予想できましょう。

永遠に忘れられない出来事。

それは……

現在継続中。

P S .

魔界ウォーズがまた流れました。

この事については、あまり驚いておりません。

予想の範囲内です。

では皆様、4のEXステージでお待ちしております。

■

お待たせしました。

2話目です。

1ヶ月近く掛かるって遅すぎですね。
すみません。
では、どうぞ。

ポケモンホワイトで、原稿が驚きの白さに…

第2話「最初の日常」

寄宿舎の寮棟から校舎へ、アサギは飛ぶように疾走している。別に遅刻したわけではなく、朝のホームルームから出席した。

5限目開始直後、アサギは教科書が無いのに気付く教師に断って寮の自室へと取りに行った。

その後とんでもない内容の緊急放送が流れて、校舎から悲鳴の大会唱が開始された。

この馬鹿騒ぎを起こした犯人を軽く捻ってやろう、とアサギは軽い気持ちで寮棟から出たら犯人、もとい原因が本当に腐るほど居た。

「邪魔！」

走りの勢いを乗せ、飛び回し蹴りで邪魔者である同じ学園の生徒を排除する。

そして着地で前進する力を殺さずそのまま前へと突っ走る。

吹っ飛ばした生徒には目もくれない。

「何が『暴力事件』よ。」

そんなラブリーなレベルじゃないっつの！」

走りながら文句を言うアサギ。

よもや昨日観た映画の内容と同じ様な世界になろうとは、一体誰が予想できようか。

「あゝ、もう！」

アタシはミラ・ジョヴォヴィッチじゃねえし、隠しキャラ出演のオファーがまた来ちまったし！！

ちくしょー！

ぐれてやんべー！！」

デイスガイア4の発表というバットニュースにも腹を立て、アサギは地獄のような学園内を駆け抜ける。

■

アサギが叫ぶ2時間ちょい前、どこにでも居そうな外見の男子、小室孝は授業中の廊下に立っていた。バケツは持っていない。

「よ、小室。

またサボリかよ？」

ソフトモヒカンに人の良さそうな顔の男子が廊下を歩いてくる。

彼は2年A組の森田。

バンドをやっていて、授業を抜けては屋上か自室でギターの練習をしている。

孝とはサボリ仲間だ。

「まあな。

お前もか？

昨日あんまり寝てないんだ。

授業もタルいし」

「女にも振られたし……ってか？

噂になってるぜ。

留年して同級生になった幼馴染みのお姉様、井豪と付き合ってたんだろ？」

「永は…麗が自分で決めたことだ。
それにそういうの面倒なんだよ。」

ま、永はいい奴だし、見かけも頭も良くってスポーツ万能。
当然さ」

「ああ…」

その、えーと…」

孝の予想以上の落ち込み様に、何かを言おうとする森田だが気ま
ずい空気ですすく言葉が見つからない。

そんな森田の気遣いが嬉しく、孝は自然と笑顔になった。

「僕は屋上で寝るよ」

「そっか。」

じゃあ、俺は寄宿舍へ潜り込むよ」

そうして2人は何も知らず、互いに最後の別れを告げた。

■

屋上へと続く非常階段の踊場、弓塚優綺は座り込んでいた。

春の暖かな風を受けるながら、彼はハードカバーの本を読んでいた。
桜の木が風に揺れる音が聞こえるその場に、階段を登る足音が加わ
る。

その足音は優綺の居る場所に到達し、そして止まった。

「弓塚？」

「こんにちは小室くん」

本から顔を上げ、ニコリと笑う。

おう、と頭を掻きながら孝は返事をした。

「こんな所で本読んでんのかよ」

「授業中の教室で堂々と読んでちゃ悪いですからね。

それにここ、僕のお気に入りの場所なんです」

「奇遇だな。

僕もだ」

優綺の正面の手すりに覆い被さるように寄りかかり、満開の桜並木を眺める。

「ところで小室くん。

宮本さんの事はまだ好きですか？」

孝の表情が一瞬で曇った。

「何でそんな事聞くんだよ？」

「噂で聞いたもので。

もう踏ん切りはついたのになって」

「そんなの…

分かんねえよ」

「では、まだ諦めきれないんですね？」

「…悪いかよ」

「いえ。

諦めきれないのは、それだけ思いが強かった証です。
悪い事ではありません」

本を閉じ、孝に向けて優綺は続ける。

「昔からの幼なじみなんですよね？」

そして振った振られたという話があったというなら、少なからず以前から思いを寄せてた証拠。

子供の頃、何か約束をしてたのでは？」

そう言われ、立てた右手の小指を見る。

そして思い出すのは小学生の頃の記憶。

その時も、桜は現在のように咲き誇っていた。

…あたし、孝ちゃんのお嫁さんになったげる。

…ほんと？

ほんとにほんと！？

…うん！

ゆびきりげんまん！

しかしその思い出は酷く色あせていた。

そうなってしまったのは、つい最近になってからだ。

…どうして留年なんかしたんだよ。

優等生なのに。

…孝にはわからないわ！

分からない…

このやり取りの後、しばらくして麗は永と付き合い始めた。

そして現在に至る。

正直、元の関係に戻りたい気持ちは少しあるが、その為に何かをしようとは思わないし、今のままの方が良い気がする。

もう何もかもが面倒に思えた。

だからこそ現実逃避をしているのだ。

「…ゆびきりげんまん、ウソついたら針千本…」

「まあ、そんなに気を落とさないで下さい。」

今は別れてますが、この先どうなるか分かりませんよ？

結婚した2人ですが真面目な永君、夜はご無沙汰で次第に麗さんの欲望がテトリス並に積み上がっていく。

そこで孝君が寝取れば万事解決です」

「待てよ。」

何でそうなる？」

「そうなる事だって十分にありえますよ。」

この『はぁりい・ポツたん』と初めての体験』にはその様なシーンがありますから」

「クソっ！」

他人事だと思つてバカにしゃがつて」

「冗談ですよ、冗談」

ふてくされる孝の横、優綺が手すりを背に寄りかかり、そして空を見上げる。

「ですが未来が分からないのは事実です。」

そして訪れた未来に満足するかしないかは本人の気持ち次第です」

「…要は前向きに考えろって事か？」

「その方が比較的に楽だと、個人的には思ってます」

「参考にするよ」

満足気に優綺が頷いた瞬間、門から大きな衝突音が聞こえた。

2人の位置からは音が聞こえた方向の門が見えるので視線を向けると、そこにはスーツ姿の男が体を門にぶつけていた。

「何だあれ？」

不審者か？」

「否定できませんね。」

何がやりたいんでしょうか？」

男の拳動は明らかに怪しかった。

どこかフラフラしてる様子で、門があるのに気付いてない感じでぶつかっている様に見える。

普通の人なら取らない行動だ。

「サラリーマンのたいあたり。」

こうかはいまひとつのようだ」

「ポケモンかよ」

などと冗談を言っていると、男に注意する為に4人の教師が出てきた。

「林先生に手島先生…」

あれだけ居れば何とかかりますね」

「それより見つかったら面倒だ。」

屋上行こうぜ」

「ぎゃあああああ!!」

突然の悲鳴に階段を昇ろうとしていた孝の動きが止まる。

そして2人は見た。

腕から血を噴水の様に出してのたうち回る手島先生を。

「…何があつたんだよ」

「分かりません。」

男が先生の腕に噛み付いたように見えましたか…

正直信じられません」

一部始終を見ていた優綺だが、その光景は自分の目を疑うには十分なものだった。

人が人の腕に噛み付き、更に動脈ごと喰いちぎる行為など正気の沙汰ではない。

他の教師が止血を試みるも血は止まらず、しばらくすると手島先生は動かなくなった。

「お、おい。」

何かヤバくないか？」

「ええ、とてつもなくヤバい状況ですよ。とりあえず救急車を呼んでおきましょう。」

小室君は警察に」

「きやあああああ！」

「え？」

林先生の悲鳴が聞こえ、何事かと優綺が視線を戻すと、そこには林先生に覆い被さり肉食動物の様に喰らいつく手島先生の姿があった。

襲っていたのだ。

捕食する為に。

それを見ていた孝は駆け出した。

「小室君！？」

「麗と永に知らせてくるから、弓塚は連絡を！」

そう言い残し、孝は自分の教室へと向かって走っていった。

優綺は携帯を取り出し、救急車を呼ぶ為に電話をした。

「…どういう事です？」

しかし、応答に出たのは無機質な音声だった。

回線が混み合っているという内容で、繋がる気配は無かった。

「まるで災害が起きてるみたいじゃないですか。
一体何が…」

と、優綺は手島先生と林先生が共に立ち上がって居るのに気付いた。

無事だったのかと思ったが様子がおかしい。

まるで門の外に居る男の状態が感染したかの様に、フラフラした足取りで校舎へと向かっている。

「まさか、ゲームや映画の世界から飛び出してきたと？」

優綺は一つの仮説を立てていた。

それはホラー系ではよくある事で、主にゲームでの話が多い。

… 事実は小説より奇なり、ですか？
おじいちゃん。

自分が持つハードカバーの本を見て、祖父が昔言っていた言葉を出す。
思い出す。

だからこそ自分の目で真実を確かめろ、と祖父は続けた。

「確かめてみますか。
真実を」

優綺の目は、いまだに門にぶつかり続ける男を見据えていた。

■
「貴方は何者ですか？」

門を挟み男と優綺は対峙していた。

優綺の問いに男は答えず、腕で宙を掻き口を開けているだけだった。自分の仮説が確信へと変わるのを感じながら、周りに人が居ないのを確認し門を壁蹴りの要領で飛び越え、男とは距離を取って左横へと着地した。

「成る程、問い掛けに答えない筈です」

正面からでは解らなかったが男の左脇腹はごっそりと無く、背骨やら残りの内臓やらが丸見えの状態で、とても生きてとは思えない。

「予想的ですか。」

「いやはや、世の中何が起こるか分かりませんね」

死体の男は優綺へと体を向け、腕を突き出し駆け出した。

「原因は何なのか知りませんがその肉体、大地に返しなさい」

迫る腕を避ける様に左前へ移動し、すれ違う死体の男の顔を右手で掴むと同時、かかと側から足払いをかけ男の後頭部を地面に向け思い切り叩き付けた。

グシャッ、という音と共に地面に激突した男は痙攣し、そして動かなくなった。

「やはり頭部へのダメージが有効みたいですね。設定通りです。」

気が進みませんが、後は手島先生と林先生を……」

男の瞼を閉じ、険しい表情を2人が向かった校舎へと向けるが、既に2人は駆け付けた他の教師に襲いかかっていた。

「手遅れになってしまったみたいですね。」

と言っても、外に居た彼や電話の事を考えると遅いか早かの差。そして生き残れるかは己次第」

再び門を飛び超えて校内へと入る。

そして武器を手に入れるべく弓道場へと走った。

■

「アタシとした事が忘れ物をするとはね」

寄宿舎の自室、アサギは机の上に置いてあった教科書を手に取り部屋を出ようとした時、充電中の携帯が鳴った。

アサギの携帯番号を知る人物は少なく、そのほとんどは同じ学園生。

心当たりの無い番号だったが、念の為に電話に出た。

「もしもし？」

「アサギさん！？」

アサギさんですね？

大丈夫ですか！！」

「え？」

「フ、フロンさん!？」

電話の相手は、以前大変世話になったフロンだった。

「良かった。」

「無事なんですね」

「無事も何も、アタシは元気にやってるツスよ」

「アサギさん、口調がプリニーさんに戻ってますよ」

「あはははは。」

「すみません、つい」

「はっ!？」

そんな事より大変なんですよ!」

いつもの彼女らしからぬ慌て様に、アサギは不安を覚えた。

「今アサギさんのいる世界で、とんでもない事が起こってるらしいんですよ。」

今朝ラハールさんがエトナさんに引っぱられて行った緊急議会で、そっちへの時空ゲートが全面閉鎖される事が決定したんです」

「へ？」

「そしてこの決定は私のいる魔界だけでなく、他の魔界も同じ決定をしたんです」

「どういう事ですか？」

「分かりません。」

ただ、エトナさんが言っていました。

『面倒な事が起きた』って」

アサギは顎に手を当てて考えた。

人格は置いといて、魔王クラスの魔神であるエトナが面倒と言う事

件。

それが何かを考えていると、部屋の天井に付いているスピーカーから放送が流れた。

『全校生徒、職員に連絡します！

全校生徒、職員に連絡します！

現在、校内で暴力事件が発生中です！

生徒は職員の誘導に従って、直ちに避難して下さい！！
繰り返します！

現在、校内で暴力——”ドガン！！”

ひい！？

来るな！！

あっちに行っギアアアアアアア！！

助け、止めてくれ！

痛い痛い痛い痛い死ぬっ止め、助けっグギアアアアアア！！！！
！！

「今の何ですか？

そっちで何が起きてるんですかアサギさん！」

「すみません。

後でかけ直しますフロンさん」

そう言って電話を切り、部屋の隅に用意してあったカバンを背負い部屋を出た。

第2話「最初の日常（後書き）」

アサギ

「>奴ら<と化した脇坂に噛まれた永。
映画通りなら、そのまま>奴ら<と化してしまう筈だった」

永

「筈って…
そうなるんだろ？」

アサギ

「しかし！
何らかの原因で、永はギルスへと覚醒した！！」

孝・麗・永

「ええ〜！？」

アサギ

「ギルスという不安定な力を永はどう使うのか？
そしてアギトへは至れるのか？
次回『仮面ライダーアサギ』第4話！

『永、咆哮』

目覚めろ、その魂！」

優綺

「もしかしてディケイドの設定ですか？」

■

バイオハザード？観ましたよ。

ネタバレしないように言うと、主人公がアサルトアーマー使ってた。あと量産型主人公がジムみたいだったり、N2地雷がドカンしたり。主人公補正はサブでも適用されたり、ウェスカーはゲーム同様ゼクトの技術も持っていたりとてんこ盛りでしたね。

うん、分かった。

バイオハザードに出てくる奴らはダメだ強すぎるよ。

小室達じゃ歯が立たねえよ。

何で走ったり泳いだりしてんだよふざけんな！

オマケにめちやくそ走って怖さに拍車かかってるっつの！

（要は面白かった）

第3話「生への逃走（前書き）」

投稿してたのすっかり忘れてました。

なんて言うか…

すみませんでした！

第3話「生への逃走」

「何だか知らないけど、アタシの平穏な学園生活を乱した罪、思い知らせてやるわ」

指を鳴らし不敵な笑みを浮かべたアサギが寮棟の出入り口を出た時、2人の男子がこちらに向かって走って来る。

同じクラスの野球部所属、佐藤と鈴木だ。

佐藤は足を負傷しているらしく鈴木のを借りていた。

「頑張れ佐藤！」

あと少しで寄宿舎だ！」

鈴木が励ますように声を掛けるが、負傷している佐藤は返事をする気力も無いらしく顔色は遠目から見ても悪い。そして数歩進んだ時、いきなり血を吐いた。

「な！？

おい、しつかりろ！！」

のたうち回り吐血し続ける佐藤と、成す術無く狼狽える鈴木をアサギは険しい表情で見ていた。

しばらくすると、佐藤は死んでしまった様に動かなくなる。

… 負傷に吐血？

まさか！

昨日見た映画が脳裏をよぎった。

確信は無いが、アサギの直感が倒れている佐藤の近くに居るのは危

険だと警告する。

「佐藤から離れる！」

「え？」

次の瞬間、倒れていた佐藤が鈴木 of 制服を掴み首に食らい付き、一気に喰いちぎった。

「あぐあっ！？」

「クソっ！」

アサギは駆け出し、面影の無くなった顔でこちらに振り向く佐藤の顔面に魔力で強化した跳び蹴りを叩き込み、そこを足場に反転し着地する。

強化された蹴りの威力はライダーキックにも匹敵し、佐藤の頭部を完全に破壊していた。

「あゝ、悪い予感しかしないんだけど」

着地姿勢のままチラッと鈴木を見ると、首は見事に頸動脈をやられていて血の海を現在進行形で形成している。

立ち上がってしばらく様子を観ていると、倒れていた鈴木が首から血を滴らせゆっくりと立ち上がった。

「出血箇所と量からして、生きてるわけ無いわよね？
とりあえず質問するけど、アンタ大丈夫？」

問いかけたアサギに鈴木が襲い掛かるが、余裕でアサギは避けて距離を取る。

すれ違いざまに見た鈴木 of 顔は酷いもので、昨日映画に出てたゾ

ンビそのものだった。

「白目剥き出し…」

視覚は無いタイプね。

どうでもいいけど」

知っている知識の中から目前のゾンビの特徴を弾き出す。

視覚の無い場合は聴覚を頼りに動くが、視覚や嗅覚で動くゾンビもいる。

魔界のゾンビは例外で、魔法生物というれっきとした生命体であり視覚もあるし知能もあるし会話もする。

しかし、例えば魔法生物だろうが死体だろうが全てのゾンビに共通する攻略法、それは脳の破壊。

「とおりやあ！！」

再び襲いかかってきた鈴木に魔力強化の回し蹴りを食らわし、校舎の壁に叩き付ける。

崩れ落ちる鈴木が再び起き上がる事は無かった。

「これはもしかして傘の名前付いた会社の仕業ですか？
だったら話は早いんだけどね」

ポリポリと頭を掻きながら携帯で該当しそうな会社名で検索するも、期待は見事に外れた。

耳を澄ませば校舎からは悲鳴が未だに聞こえるが、最初の頃よりは数は少なくなっている。

この状況に馴染んだか、あるいは歩く屍の仲間入りをしたか。
大半の理由は後者が圧倒的に多いだろう。

「楽しい状況ね。」

オマケにまた隠しキャラのオフアー来てるし」

アサギは青空に向けて嫌味を吐く。

彼女がこの世界に来る前の世界とさえ、裏切り上等、極悪万歳の無法地帯の魔界や異界ばかりだった。

3分前の仲間が敵になる事は日常茶飯事。

そんな場所に長年身を置いていたアサギにとって、同じクラスメイトが命を脅かす存在に変貌した時、排除するのに躊躇いなど無い。しかし、だからと言って良い気分はしない。

それは隠しキャラのオフアー然り。

「これを兵器として作り出した奴がいるなら天才だね。」

粗品として鉛玉をドタマにぶち込んでやる」

携帯を仕舞い周りの状況を確認する。

元は生徒のゾンビ数体がこちらへ向かってくるが、物の数ではない。

「え〜っと、こういう時のセオリーは生存者を見つけるんだっけ？
とすると可能性があるのは校医のマリちゃんか。
ああいうタイプって、どういうワケか知らないけど生存率高いのよね」

目的地を保健室に決め、アサギは駆け出した。

■

「さてと。」

弓と矢を持ちましたし、部室に積んでた文庫本も回収しましたし。後は――」

「ぐれてやんべー――!!」

「え?」

聞き覚えのある叫び声に視線を向ければ、そこには人間でなくなつた生徒を蹴り飛ばしながら走るアサギがいた。

「なんて豪快な…」

アサギさん!

無事だつたんですね!」

「チエストオオオ!」

走り寄つた瞬間アサギの後ろ回し蹴りが飛んできたが、優騎は紙一重でそれを避けた。
が、蹴りの衝撃波で転倒してしまう。

「い、生きてます!」

僕はまだ生きてますよアサギさん!??」

「あれ?」

何だ優騎か。

てつきりゾンビかと思つたじゃない」

「思い込みで殺そうとしないで下さいよ。」

今の僕じゃなかったら、確実に食らつてあの世逝きですよ」

フラつく頭を抱え、何とか立ち上がる優騎。

アサギは軽く謝り、周りの状況を確認する。

近くにゾンビ化した生徒は居ない。

そのほとんどは、アサギが通って来た道の両サイドに転がっていた。

「やりすぎたかな？」

「ちょうど良い位です。」

「これからどうします？」

「アタシの予定ではマリちゃんを迎えに行くつもりなんだけど」

「僕は小室君と合流するつもりです。」

多分、宮本さんと井豪君と一緒に居るでしょうから」

その言葉を聞き、アサギはどうするか一旦考えようとして固まった。

「ねえ。」

井豪って確か空手の有段者よね？」

「そうですよ？」

「だとしたらヤバいわ。」

アタシが小室達の所に向かうから、優騎はマリちゃんをお願い！」

「どういう事です？」

「空手の有段者が武器を持って戦うと思う？」

「いや、流石に武器を持って戦いますよ」

「相手が一撃でも貰うとアウトなゾンビだと知らなくても？」

言われて優騎はハツとした。

永の人格を考えると、武器を持つて応戦するとは考え難い。

しかも相手がゾンビと想定する事など、よほどの妄想癖でなければしないだろう。

自分達は別だが。

「もしかしたら手遅れになってるかも」

「洒落になってませんよアサギさん」

「洒落でこんな事言わないわ。」

それじゃあ非常ベル鳴らすから、そしたら私は小室達と合流したと思つて職員室に向かつて。

まだ車での脱出が有効な筈だし、鍵はあそこにしかないだろうから「了解です。」

ところで彼等の居場所は分かります？」

「携帯で確認する。」

まあ、井豪の考えで屋上に避難してるだろうけどね。

じゃ、職員室で会いましょう」

アサギは校舎の中へと消え、優騎は保健室へと向かつていった。

■

藤見学園屋上、そこにもゾンビと化した元生徒が溢れているが、生存者もいた。

小室孝と宮本麗。

2人は天文台に上がり、階段を塞ぎそこに非難していた。

「…本当に、どうしたもんかな」

階段を塞ぐ為に作ったバリケードに死者達が当たる音を聞きながら孝が呟く。

「…率直ね」

「ウソをついてどうなるよ？」

麗の言葉に音がする方を親指で指し、そして2人で笑った。
先程の事でかなり取り乱してた麗だが、だいぶ落ち着いてきた。
そして彼女は不意に立ち上がった。

「あたし、やっぱりお父さんに連絡してみる。
携帯貸して」

「いくら麗の親父さんが警察官でも、110番が通じないんだぜ？」
「大丈夫。」

普段、絶対にかげちゃ駄目っていう秘密の携帯番号を知ってるから
番号を押し、呼び出し音が流れる。

「通じた！？

お父さ――

「もしもし、孝君か！」

「お父さん？」

お父さん！！

わたし達学校で――

「この番号を麗から聞いたんだな？」

麗は無事……な？」

「お父さん！！

あたしの声、聞こえないの？」

「……だ！！

いいかい、君のご家族は……から、街には……」

「お父さん！！

お父さん！！」

こちら側の声が聞こえないのか、麗の父親は一方的に喋る。
しかもかなり焦っている様子だ。

「……らしい。
『ガンッ』
いいね？
街には――」

そこで通話が切れる。

切れる間際、銃の発砲音が聞こえた。

そして携帯の画面には、リダイヤルと圏外の表示が出ていた。

「どうして？」

「どうしてよ――！」

今通じたばかりじゃないの――！」

「麗っ――！」

「お父さん、最後まで私だって気付かなかったよお――！」

泣きじゃくる麗を、孝はただ抱き締めるしかできなかった。

絶望的な状況に、ヤケクソの様な行動に出ようと思った時、携帯の着信音が鳴る。

麗は急いで携帯の通話ボタンを押した。

「お父さん――！」

「え？」

何で小室の携帯に宮本さんが出てるワケ？

しかもいつの間にパパになったんだアタシは？」

「……朝霧さん？」

「おはこんばんちわ――」

昨夜一緒に映画を見た朝霧アサギです」

予想外の電話の相手に戸惑い、麗は何を話たらいいいのか迷ってい

たが向こうからの質問が飛んできた。

「あのさ。

今どこに居る？」

「屋上の天文台」

「うし！

予想的中」

ちよつと待ってて、すぐに行くから」

「え？

駄目、来ないで！

屋上には>>奴ら<<がいっぱい居るの！」

「それは無理な要望ね」

次の瞬間、屋上への入り口が勢いよく開いた。

「もう着いたから」

「朝霧！？」

「朝霧さん逃げて！！」

突然の登場に驚く孝をよそに、麗は目一杯叫んだ。
しかし、当の本人は余裕たつぷりに構えている。

「ふうん、そこそこの数が揃ってるじゃん。

まあ、アタシの敵じゃないけどね」

ドアを開けた音に反応し、死体達が一斉にアサギへと襲いかかる。
普通こうなってしまうては喰われる以外の道はない。しかし、アサギは先頭のゾンビを踏み台にして高くジャンプし、落下する勢いと魔力を乗せて真下にいるゾンビの頭を嫌な音と共に蹴り潰す。
そして頭部の無くなったゾンビの体を踏み台にし、再び高くジャン

プして別の奴へと落下。

まるで飛び石を渡るように、次々と死体達の頭を踏み潰しながら孝と麗のいる天文台へ行く。

アサギが屋上の床に着地した時には、既に動く死体は一体も存在していなかった。

「ふう」。

いい運動しちゃった」

両脚を軽く振り、靴に付いた血を振り落とす。

「アサギ…さん？」

何？

いまの？」

怯えた麗の声を聞き顔を上げると、警戒心丸出しの表情をした孝が怯える麗を守る様に背にしている。

その光景に少し感心しつつ、どう言い訳をしようか考える。

うっかり人間離れた技を披露してしまったのだ、何か良い妙案はないか考えを巡らせる。

…しかし、まるで化け物を見るような目で見ないで欲しいなあ」。

2人は正に怪物を発見したような顔をしていて、流石のアサギでもハートブレイク寸前。

と、そこでとある人物から教わった説得方法を思い出した。

「鍛えてますから」

爽やかな笑顔で、右手の人差し指と中指を立て『シュッ！』とポ

―ズをとる。

気のせいかな、紫色の鬼のビジョンが見える。

「あ…そうなの？」

「鍛えてるんじゃない…しょうがない…よな？」

腑に落ちず歯切れの悪い返事だが、とりあえず納得する2人。

…すげえ。

流石はアノ人の説得方法、教えてもらっという良かった。しかし何故に納得させられるんだろ？

驚異の効果に恐ろしモノを感じるアサギ。

『鍛えてますから』と本人の声が聞こえた気がした。

「それより無事で良かったわ。

2人だけ？

井豪は居ないの？」

途端、2人の表情が曇ったのを見てアサギは理解した。

「そ。

ちよつと見せて貰えるかな？

せめてマシな顔で眠らせた方がいいでしょ」

「え！？」

でも…」

「今更死体にビビったりしないわ」

2人と同じ場所に来て、横たわる永の亡骸の側に寄る。

顔を隠す為にかけてあったタオルを頭に巻き、殴ってできた凹み

を隠し瞼を閉じる。

血痕が無ければ、寝てるようにさえ見える。

「それじゃあ行くとしますか」

「どこに？」

「決まってるでしょ？」

「生き残れる場所に」

第3話「生への逃走（後書き）」

アサギ

「無事に優綺と合流した私達。

学園を脱出すべく、車のキーがある職員室へと向かうと一組の男女が戦っていた」

????

「…あははっ。

本当だあ、その気になれば痛みなんて完全に消しちゃえるんだあ…」

????

「どこだあああああ！

メエエエエタアトロオオオオン！！」

孝

「高城と平野じゃねえ！？

誰だ、あの青い娘と黒いヤツは？」

麗

「分からないけど、仲間にすれば間違いなく面倒くさい事になりそうな予感がする」

アサギ

「無事に車のキーを入手して学園脱出なるか？

次回『魔法少女でもん べいん』第4話！

『チャイルドもプレイもあるんだよ』

アナタのハートに、ティロ・フィナーレ！」

???

「あたしって、ほんとバカ」

???

「青空には何も無いんだ…」

ぼくを、おびやかすものが、なにも」

優綺

「どうしよう。

この2人」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1903n/>

朝霧黙示録－HIGH SCHOOL OF THE DEAD in ASAGI－

2011年4月1日14時57分発行